

### グレゴリオ聖歌:サルヴェレジーナ

「サルヴェ・レジーナ」とは、カトリック教会で用いられる聖母マリアのための 4 つのアンティフォナ(交唱)のうちの 1 つ。日本では「元后あわれみの母」という訳語が用いられるが、「めでたし女王」といった意味。聖務日課の「終課」において歌われる。

### J.S.バッハ:無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第 2 番 より アルマンド コハーン:アルマンド

J.S.バッハの《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ》(全 3 曲)は 1720 年以前、ケーテン宮廷楽長時代前半の所産とされる。パルティータ第 2 番の第 1 楽章アルマンドは「ドイツ風」という意味を持つ舞曲で、本日はこれに続いてコハーン自作の「アルマンド」を演奏する。

### J.S.バッハ:無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第 1 番 より ダブル コハーン:ダブル

パルティータ第 1 番には、基本となる 4 つの舞曲にそれぞれ「ダブル」という変奏曲が付く。本日はこれに続いてコハーン自作の「ダブル」を演奏する。

### J.S.バッハ:無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第 2 番 より ジーグ コハーン:ジーグ

伝統的な組曲を構成する「ジーグ」は「サラバンド」のあとが定位置。跳躍や、複雑なアクセントを特徴とし、落ち着くことなく一気に駆け抜ける。本日はこれに続いてコハーン自作の「ジーグ」を演奏する。

### J.グラネーロ:5つの小品

ホセ・ゴンサレス・グラネーロは、サンフランシスコ・ベイエリアを拠点として活動するスペイン系アメリカ人作曲家で、サンフランシスコ歌劇場管弦楽団の首席クラリネット奏者でもある。《5 つの小品》は、グラネーロがスペインを旅した体験をもとに 2021 年に作曲。グラナダにあるファリャの家を訪れた思い出を描いた第 1 曲、地中海への誘いを描く第 2 曲、前半と後半をつなぐ第 3 曲、実の娘に捧げた第 4 曲、終曲はスペイン南部では路上で見ることのできるフラメンコの歌と踊りが描かれる。

### G.ヴァイダ:光と陰影の震え

指揮者として華々しい経歴を持つグレゴリー・ヴァイダは、ブダペストの音楽一家に生まれた。クラリネット奏者と作曲家の顔も併せ持ち、とくに作曲は昨年亡くなったペーテル・エトヴェシュの薫陶を受けている。本曲は無伴奏クラリネットのために 1993 年に作曲された作品。ハンガリーの詩人アンドラーシュ・ペテーツへのオマージュと記されている。

## B. マントヴァーニ: バグ

36 歳という異例の若さでパリ国立高等音楽院の院長に就いたブルーノ・マントヴァーニは、フランスの現代音楽作曲家。1999 年に作曲された本曲は、西暦 2000 年になる時にコンピュータが誤作動するかも知れないと言われた問題(「ミレニアム・バグ」とも呼ばれた)を音楽的メタファーとしている。

## E. デニゾフ: 無伴奏クラリネットのためのソナタ

旧ソ連の作曲家エディソン・デニゾフはロシア前衛音楽の先駆者。若い頃にシオスタコーヴィチに自作を送り、激励されたこともある。当時の社会主義リアリズムに抗して反体制的に活動していたが、ソ連の崩壊とともに西側に亡命。全 2 楽章からなるこの無伴奏クラリネットのための曲は 1972 年に作曲され、ロシアのクラリネット奏者レフ・ミハイロフに献呈された。

## J. ヴイトマン: 幻想曲

クラリネット奏者のみならず、指揮者としても活躍するイェルク・ヴィトマンはドイツの現代音楽作曲家。本曲はキャリア最初期の 1993 年、20 歳の時に作曲された。ブーレーズ《二重の影の対話》の影響を受けており、イタリアの伝統的な即興劇コメディア・デラルテの道化・軽業師アルレッキーノのイメージが飛来する。単一楽章だが、大きくは 4 部分に分けられる。

## コハーンの世界(作曲者自身による解説)

「**WINDOWS**」はムソルグスキーの《展覧会の絵》にインスパイアされた曲です。絵画は人生への「窓」のようなもので、すべての窓に違う景色、場所だけでなく、さまざまな人々や状況が広がっています。この「ウィンドウズ」は、人間のいくつかの感情、我々が日々闘わねばならないもののショーケースです。

「**INHALE-EXHALE**」(入出息)は瞑想から生まれました。私は日常的に瞑想をしますが、瞑想は心を集中させ、神経のリセットしてくれます。初心者にもっとも効果的なのはガイド付きの瞑想であり、私は聴衆がそれに合わせて呼吸できるような音楽をつくりました。演奏者は聴衆の集中力を言葉ではなく、音楽によって導いていきます。

「かぶきもの」は、バルトークの《中国の不思議な役人》にインスパイアされた曲です。内容に関するちょっとしたエピソードをご紹介します。主要キャラクターの「ガイジン」が歌舞伎町をうろついていると、三人の人物に出会います。太った大柄のヤクザ、若くて美しいホステス、そして「サル男」です。曲を通じて彼らのモチーフが登場し、ファイトシーンやリアクションなどが目に浮かぶようです。